

「基礎教学試験」(本年十月実施)の教材【下】

創価学会の歴史

牧口先生・戸田先生の 師弟の出会い

人生の師を求めていた戸田先生は、東京で牧口先生と出会います。牧口先生48歳、戸田先生19歳の時でした。間もなく、戸田先生は、牧口先生のもとで教師生活を始め、師と定めた牧口先生を陰に陽に支えます。

創価教育学会の創立

牧口先生は、自ら教育者として初等教育の現場に関わるなかで、すべての子どもが自らの手で幸福を勝ち取っている自立した社会人として成長していくことを願い、それを可能にする教育の確立を模索していきました。そして、独自の教育学を構想し、その土台となる価値論を深く追求しました。そのなかで、人間が社会の中で価値を創造しゆく確固たる主体となりうる生命変革の原理と、そのための根本の実践を明かした日蓮大聖人の仏法に出会い、昭和3年(1928年)、大聖人の仏法を継承した日興上人の流れを汲んでいた日蓮正宗に入信しました。57歳の時でした。

なお、戸田先生も、牧口先生に従って、同年に、大聖人の仏法に帰依しました。

昭和5年(1930年)11月18日、牧口先生は『創価教育学体系』第1巻を発刊しました。この書は、牧口先生が構築された教育学の体系をとどめるものであり、全12巻が予定されていました。弟子である戸田先生が私財をなげうって出版を支え、また、牧口先生の教育理論のメモを整理・結果するなど全面的に協力しています。また、その奥付には、著者である牧口先生、発行兼印刷者である戸田先生の名前とともに、発行所として創価学会の前身となる「創価教育学会」の名が記されています。そこで、回書が行された11月18日をもって、創価学会の創立記念日としています。

「創価」とは「価値創造」の意味です。教育の目的、そして人生の目的は幸福の追求にあり、その内実は価値の創造であるという牧口先生の思想が込められた言葉です。

大聖人直結の仏法の実践

当初、牧口先生、戸田先生の師弟二人で出発した創価教育学会は、次第に構造的にも整えられ、発展していきます。当初、創価教育學説に共鳴する教育者の団体でしたが、やがて教育者以外の人々も加わるようになり、価値創造の根本ともいべき日蓮大聖人の仏法を実践する団体となつていきました。

そして、創価教育学会は、日蓮正宗の在家信徒団体となりますが、従来の講(僧侶の指導のもと本寺に所属する信徒団体)とは全く別の在り方をとつてきました。牧口会長、戸田理事長のもと、会の運営も会員の信心指導も、僧侶に依存することなく学会独自で行っていました。学会は当初から、従来の日蓮正宗宗門の枠を超えた独自の在家団体だったのでした。

また、その実践においても、仏法を寺院や葬式などの儀式に閉じ込めるのではなく、信行の深化により各人の現実の人生における幸福の実現、そして、社会の平和と繁栄の実現を目指す開かれたものであり、日蓮大聖人の仏法本来の実践の在り方に基ついたものでした。

軍国主義との戦い

しかし、「国家神道」を精神的支柱として、軍国主義に傾斜し、戦争拡大に暴走する政府は、国内の思想統制を強化し、学会の座談会なども思想犯の摘発を任務とする特高(特別高等警察)の監視下で行われるようになりました。

当時、政府は神社参拝や神札を祭るとを国民に強要していました。昭和18年(1943年)6月、学会は権力の弾圧を恐れた宗門から「神札を受けるように」と言い渡されました。この宗門の態度は、謗法(正法を誘ふこと)容認の行為であり、日蓮大聖人、日興上人の教え

に背くものでした。これに対して、学会は日蓮大聖人が示された謗法厳戒の教えを貫き、神札の受け取りを拒否しました。

同年7月6日、牧口先生は地方折伏で訪れていた伊豆・下田で、同日、戸田先生は東京で、特高刑事に連行され、最終的に21人の幹部が逮捕されました。不敬罪と治安維持法違反容疑が、逮捕の理由でした。厳しい取り調べのなかで、最後まで退転することなく信仰を貫き通したのは牧口先生と戸田先生の師弟だけでした。

戸田先生の獄中の悟達

牧口先生は、取り調べに当たった検事や判事にも日蓮大聖人の仏法の教義を説きました。権力の弾圧に屈せず、仏法の正義を貫き通したのです。

昭和19年(1944年)11月18日、牧口先生は、老衰と栄養失調のため、東京拘置所内で逝去しました。奇しくも「創立記念日」と同日に満73歳で殉教したのです。その生涯は、まさに御書に仰せの通りに不惜身命の実践を貫き、日蓮大聖人の民衆救済と妙法弘通の御精神を現代に蘇らせた尊い先駆の一生でした。

戸田先生は、昭和19年初頭から、獄中で唱題に励むとともに、法華経を読み、思索していきました。そのなかで「仏とは生命である」との悟達を得ました。

さらに唱題と思索を重ねていったとき、戸田先生は自身にまさに、法華経に説かれる虚空会の儀式で、釈尊の滅後に法華経を广泛宣传していく使命を託された地涌の菩薩にはかならないことを悟り、「われ地涌の菩薩なり」との確信を得ました。昭和19年11月のことです。

戸田先生は、この獄中の悟達で、日蓮大聖人の仏法への確信を不動のものとするとともに、広宣流布を自らの使命として自覚しました。戸田先生のこの「獄中の悟達」が戦後の創価学会発展の原点となりました。

戸田城聖 第2代会長の時代

昭和20年（1945年）7月3日、2年の獄中生活を耐え抜いて出獄した戸田先生は、ただ一人立ち上がり、理事長として、壊滅状態だった学会の再建に直ちに着手します。

まず、会の名称を教育改革だけでなく、広宣流布という全民衆の幸福と世界の平和を目指す学会の目的に即して、「創価学会」に改め、座談会や地方折伏も再開しました。

戸田先生・池田先生の 師弟の出会い

昭和22年（1947年）、戸田先生と、第3代会長（現・名誉会長）池田大作先生の師弟が出会います。

池田先生は、昭和3年（1928年）1月2日、現在の東京都大田区大森北で生まれました。

13歳の時に太平洋戦争が勃発。やがて戦況が悪化するなか、働き盛りの4人の兄が、皆、徴兵され、池田先生は家を支えながら軍需工場で働きますが、このころから結核にも侵され、生死の問題に苦悩する青春時代を送りました。

戦争がアジアの民衆を苦しめていると、長兄の言葉や、空襲で焼け出されたことから、戦争の矛盾や悲惨さを痛感。特に、長兄を失った母の悲しみの姿を通して戦争の悪を実感したのです。戦後は文学や哲学の書を通じ、確かな人生観を模索していました。

そうしたなか、池田先生は、昭和22年（1947年）8月14日、初めて創価学会の座談会に出席し、そこで、生涯の師となる戸田先生と出会いました。

この日、戸田先生は、立正安国論を講義していました。講義終了後、池田先生は、戸田先生に「正しい人生とは」「本当の愛国者とは」「南無妙法蓮華経とは」「天皇について」と次々に質問しました。軍部政府と戦い、2年間の獄中闘争を貫いた戸田先生の、深い信念が師打ち、理路整然とした明快な答えに、池田先生は、「この人の言うことなら信じられる」と直感します。そして、10日後の昭和22年

8月24日、信仰の道に入りました。戸田先生47歳、池田先生19歳の時でした。

池田先生は、その翌年、大世学院（東京富士大学短期大学の前身）夜間部に学びます。9月には、戸田先生による法華経講義の受講生となり、仏法の研さんを深めるなかで、戸田先生を師とすることを誓います。また、昭和24年（1949年）1月、戸田先生が経営する出版社に入社し、少年雑誌の編集に携わります。

師弟共戦による学会再建

昭和24年7月には、創価学会の機関誌として新たに「大白蓮華」が誕生。その創刊号に戸田先生は論文「生命論」を執筆しました。

ほどなく、戸田先生の事業は日本経済の混乱の影響を受けて苦境に陥り、翌25年（1950年）8月24日、戸田先生は、学会の理事長を辞任する意向を発表します。この時、戸田先生は、「これから、私の師匠は誰になるのでしょうか」と尋ねる池田先生に対し、「苦労ばかりかけるけれども、君の師匠は、この私だよ」と師弟の絆を確認しています。

池田先生は、戸田先生の事業の残務整理などに奔走するなかで、この窮地を打開し、必ず戸田先生に学会の会長になっていただくのだと深く決意しました。

師匠を支えるために夜学を断念した池田先生に対して、戸田先生は、大学教育にも優る、万般の学問の個人教授をしていきました。この個人教授は、戸田先生が逝去される前まで続き「戸田大学」と呼ばれています。

第2代会長就任

昭和26年（1951年）5月3日、苦境を勝ち越えた戸田先生は、多くの会員の推戴を受けて、第2代会長に就任します。そのあいさつで、75万世帯の折伏を達成するとの誓願を宣言しました。当時の学会員は実質約3000人。誰もが信じられない弘教の目標でした。

そして、戸田先生は、会長就任に前後して広宣流布への布陣を整えます。会長就任直前の4月20日には機関紙「聖教新聞」が創刊され、戸田先生はその創刊号から、小説「人間革命」を執筆しました。

また、会長就任後には、直ちに、婦人部、男子部、女子部などの各部組織を相次いで結成しました。

そうしたなか、翌27年（1952年）1月、戸田先生の命を受けて蒲田支部の支部幹事になった池田先生は、1カ月間で支部201世帯の弘教を達成。当時の弘教の壁を破つたのです。これが契機となって、学会全体の弘教が加速的に進んでいくようになります。

一方、戸田先生は、御書全集の発刊にも取り組みました。広宣流布を進めていくためには、御書を正しく研さんしていくことが不可欠だったからです。

戸田先生は、宗門の碩学・日享上人に編纂を依頼し、昭和27年4月の立宗700年の節目に『日蓮大聖人御書全集』を発刊しました。この御書全集を会員一人一人が真剣に研さんすることで、御書根本の精神が学会全体に確立されていきました。

また、同年9月、創価学会は宗教学人として法人格を取得しました（宗教学人「創価学会」の設立）。

権力の魔性の蠢動

学会は、民衆の幸福と社会の平和のために戦われた日蓮大聖人の「立正安国」の精神を踏まえて、腐敗した政治を浄化し、民衆の手に政治を取り戻すために、昭和30年（1955年）4月の統一地方選挙で初めて独自に推薦する候補を立てました。

翌31年（1956年）、池田先生は関西で折伏を積極的に推進し、5月には大阪支部が1万1111世帯という未曾有の弘教を達成。また、7月に行われた参議院議員選挙では、池田先生が支援活動の責任者となった大阪地方区で、当選は不可能といわれた予想を覆し、支持した候補者は当選を果たします。一般紙も「まさか」が実現」との見出しを掲げるほどの見事な勝利でした。

この選挙では、全国で計3人の参議院議員が誕生。このころから、創価学会は社会的に影響力を持つ団体として注目されるようになり、それと同時に、さまざまな既成勢力から不当な圧迫が加えられるようになります。

そうした弾圧に対して、池田先生は、学会員を守るために果敢に戦いました。北海道の夕張炭労（炭鉱の労働組合）が信教の自由を踏みにじり、学会員を圧迫する動きをみせていることに對しても、昭和32年（1957年）6月、直ちに現地に赴き、炭労に断固抗議する姿勢を明確に示し、事件の解決に奮闘しました（夕張炭労事件）。

その直後の7月3日、池田先生は大阪府警に不当逮捕されました（大阪事件）。これは同年4月に行われた参院大阪地方区の補欠選挙で選挙違反者が出たことに関連して、全く潔白な池田先生を事件の首謀者に仕立て上げ、事実無根の罪を着せようとしたものでした。この7月3日は、昭和20年に戸田先生が出獄した日と同じ日であり、池田先生は後年、「出獄と入獄の日に 師弟あり」と詠みました。

15日間にわたる過酷な取り調べで、検察は、池田先生に「罪を認めなければ、戸田会長を逮捕する」などといって迫りました。既に戸田先生の体は衰弱していました。池田先生は、師の生命を守るためにやむなく罪を一身に被り、7月17日に大阪拘留所を出所。池田先生は法廷で真実を争い、昭和37年（1962年）1月25日、無罪が確定します。

広宣流布の後継を託す

昭和32年（1957年）9月8日、戸田先生は、創価学会の平和運動の基調となる「原水爆禁止宣言」を発表します。この宣言では、仏法の生命尊厳の原理のうえから、核兵器を人類の生存権を奪う「魔」の産物ととらえ、核兵器の使用を絶対悪として断罪しています。

同年12月には、戸田先生の生涯の願業であった75万世帯を達成しました。

翌33年（1958年）3月には学会が大石寺に建立寄進した大講堂が完成。3月16日には、青年部員6000人に對して広宣流布の一切を託す儀式が行われ、席上、戸田先生は、「創価学会は、宗教界の王者である！」と宣言します。戸田先生から、池田先生に広宣流布を託したこの「3・16」は、後に「広宣流布記念の日」となっています。

昭和33年（1958年）4月2日、

戸田先生は一切の願業を成就し、満58歳で逝去しました。戸田先生は獄中の悟達を原点として学会を再建し、広宣流布の揺るがぬ基礎を築いたのです。

池田大作 第3代会長 第SGI代会長の時代

戸田先生の逝去後、ただ一人の総務として実質的に学会の運営を担っていた池田先生は、昭和35年（1960年）5月3日に第3代会長に就任しました。

「若輩ではございますが、本日より、戸田門下生を代表して化儀の広宣流布をめざし、一歩前進への指揮をとらせていただきます！」——戸田先生の時と同じ「5・3」に行われた会長就任式における、池田先生のこの第一声の師子吼から、学会の新たな大前進が始まりました。

昭和35年10月2日には南北アメリカへ出発。世界広布の第一歩を踏み出しました。翌36年（1961年）1月には香港、インドなどアジアを初訪問。同年10月にもヨーロッパを訪問するなど、世界広布の布石を打つていきます。日蓮大聖人が示された「仏法西還」「一閻浮提広宣流布」の本格的な第一歩が、池田先生によって印されたのです。

平和・文化・教育の運動

池田先生の提案で教育部（現・教育本部）、学術部、芸術部、文芸部、国際部（現・国際本部）、ドクター部が結成され、東洋学術研究所（現・東洋哲学研究所）や民主音楽協会（略称・民音）が誕生し、さらに富士美術館・東京富士美術館が設立されるなど、多彩な教育・文化運動が展開されます。

また、牧口先生、戸田先生の教育理念の実現に取り組み、東京・小平市に創価中学・高校（昭和43年開校）、東京・八王子市に創価大学（昭和46年開校）、大阪・交野市に創価女子中学・高校（昭和48年開校。現在は関西創価中学・高校）を創立するなど、幼稚園、小学校から短大・大学、大学院までの「創価教育」の教育機関を作りました。平成13年（2001年）にはカリフォルニア州オ

レンジ郡に、アメリカ創価大学が開学しました。

さらに、池田先生の平和・文化・教育に焦点をあてた対話の行動は、世界に大きく広がっていきました。

昭和43年（1968年）9月8日には日中国交正常化提言を発表。

昭和47年（1972年）から、池田先生はイギリスの世界的歴史家アノルド・トインビー博士と2年越し40時間に及ぶ対談を行いました。

このころから世界の識者との対話による「平和・文化・教育の交流」が本格的に始まります。

そして昭和50年（1975年）1月26日には世界51カ国・地域の代表がグアム島に集まって創価学会インタナショナル（SGI）が発足し、池田先生がSGI会長に就任しました。

国内においては、昭和54年（1979年）4月、池田先生は創価学会の名譽会長に就任しました。

相次ぐ賞讃と顕彰

昭和58年（1983年）から、1月26日の「SGIの日」を記念して池田先生は、毎年「平和提言」を発表。その提言は世界から注目されています。また、世界の大学や学術機関での講演も30回以上になります。

池田先生と海外の識者との対談も広がり、国家元首、文化人、大学総長らとの対話が1600回以上。世界の識者との対談集は約50点にのぼり、このうちトインビー対談は、世界28言語で出版され、「世界の文化の道標」「人類の教科書」と評されるなど、世界の学識者や指導者に賛同を広げています。こうした「文明間対話」「宗教間対話」は、相互理解を深め、民衆の交流を結ぶ善の連帯を築き上げています。

こうしたSGIの運動に對して、世界からは、牧口先生、戸田先生、池田先生の名前が冠された、公園や通りなどが各地で誕生し、池田先生に世界各国から国家勲章、各学術機関から名譽博士・名譽教授等の称号、世界各地の名譽市民の称号が授与されるなど、賞讃と顕彰が相次いでいます。

創価スピリット 日顕宗の邪義を破す

日顕宗の主な邪義

1. 日顕宗の中心教義「法主信仰」

現宗門を、なぜ「日顕宗」と呼ぶのか。それは、日顕宗の教義が、法主を信仰の対象としているからです。本来、法主とは、信行学の範となり、仏法を護持する存在でなければなりません。ところが、日顕宗が終始、主張しているのは、「法主は絶対であるから、ともかく法主に従え」という、一切の対話を拒絶して独善化を進める「法主絶対論・法主信仰」なのです。

この法主信仰こそ、日蓮大聖人の仏法の三寶を破壊する大慢心の教義であり、日顕宗が最大の邪教と化した根幹の要因です。

たとえば、宗門の公式文書には次のようにあります。(宗門の機関誌に掲載されたいわゆる「能化文書」)。「唯授一人の血脈の当処は、戒壇の大御本尊と不二の尊体にまします」「この根本の二つ(御本尊と法主)に対する信心は、絶対でなければなりません」

これほどの前代未聞の邪義はありません。法主が大御本尊と不二の尊体であるとは、法主を絶対なるものとして礼拝し、信仰せよということです。これは、本来、御本尊をお守りする役割である法主が、その役割をわきまえず、尊極の法体である御本尊と同等の地位にまでのし上がった教義にほかなりません。

「御本尊根本」こそ正しい信心

日蓮大聖人は「此の曼荼羅能く能く信ぜさせ給うべし」(御書二二四頁)、「無二に信ずる故によつて・此の御本尊の宝塔の中へ入るべきなり」(同二二五頁)等と仰せです。

「御本尊根本の信心」こそが、大聖人・日興上人以来の正しい信心です。その御本尊に対して、法主を加えて「根本の二つ」とすることは、大聖人・日興上人のお心に背く邪義であることは論を待ちません。

法主の絶対視は大聖人・日興上人に違背

「日興遺誠置文」には、次のようにあります。

「時の眞主為りと雖も仏法に相違して己義を構えば之を用り可からざる事」(同二六八頁)

この遺誠は、たとえ法主であろうとも仏法から逸脱して、自分勝手な主張をする場合は、それを用いてはならないと断言されているものです。また、この仰せからうかがえるように、日興上人は、後代の法主が誤りを犯すこともありうると思定されていたのです。

この「遺誠置文」に照らしても、法主を絶対視することは、大聖人・日興上人に完全に違背した邪義であることは明白です。

2. 神秘的血脈の嘘

日顕宗で法主が絶対であるとする考えが生じているのも、もともとは、前提となる血脈観が誤っているかにはかなりません。

すなわち、前の法主から「血脈相承」を受けただけで、仏の内証の悟り、法体が次の法主へ伝えられるとする、神秘的な血脈観のことでです。

先の「能化文書」には、「唯授一人の血脈法水は、まさに人法一箇の御法体です」などと記されています。

しかし、このような神秘的な血脈観も、後の時代の者が、法主の権威を主張するために作つたものであり、大聖人、日興上人の教えとは無縁の邪義です。

大聖人の仏法における血脈とは、本来、一切衆生に開かれたものであり、一部の者が独占するものではありません。

「血脈」の本義は万人に開かれた「信心」

大聖人御在世当時の日本仏教界では、「血脈」の名のもとに、ごく一部の閉ざされた人間だけに仏法の奥義なるものが伝わりとする「秘伝主義」が横行していました。

それに対して大聖人は、「生死一大事血脈抄」に「日本国の一切衆生に法華経を

信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめんとする」(同二三三頁)と仰せになり、成仏の血脈は特定の人間のみが所持するものではなく、万人に開かれるものであることを明確に示されています。

そして、大聖人の仏法においては、「血脈」といつても、結論は「信心の血脈」という表現にあるように「信心」のことです。

これに対して、相承されれば、信心、実践と関係なく、そのまま仏であるとする日顕宗の特権的・神秘的相承観は、「信心の血脈」という血脈の本義を破る邪義以外の何ものでもありません。

3. 「僧俗差別主義」の時代錯誤

日顕および日顕宗の僧侶に共通しているのは、「僧が上で信者は下」という、信徒に対する抜きがたい「差別思想」です。

たとえば、日顕が平成2年(1990年)に学会を切ろうとした際に「20万こつちにつけばいい」と語っていたことは有名です。その20万というのは、自分たちが贅沢な三昧する生活を続けるための人数です。こうした発言自体、信徒の幸福を全く考えていないことを物語っています。

大聖人は「此の世の中の男女僧尼は嫌うべからず法華経を持たせ給う人は一切衆生のしうこそ仏は御らん候らめ」(同二二四頁)、「僧も俗も尼も女も一句をも人にかたらん人は如来の使と見えたり」(同二二五頁)と、明確に僧俗の平等を説かれています。

僧俗ばかりか、すべての人間の平等こそ法華経、大聖人の教えの根幹をなす思想です。仏法上の師匠と弟子の関係も、「師弟不二」の原理に示されているように、相互の尊敬と信頼のもとに、共通の責任と決意をもって広宣流布へ前進していくことを意味しています。

しかし、宗門では師匠とは単に事務的な立場や役職で決められ、信徒を意のままに扱う権威の象徴にすぎないのです。このように「僧俗差別主義」は大聖人の人間主義の仏法を冒瀆する時代錯誤の誤つた思想、体質なのです。